

「もしも」に備えてできること

日々、生活していくなかで、意図せず「突然の病」は訪れます。それが原因となり、これまでの日常生活が難しくなることも、もちろんあります。しかし、そのような状況でも自分で意思決定していくことは可能です。ここでは、最期まで自分の考えを実践した方の事例を紹介します。「もしも」のときを考えるきっかけにしてみてください。

私の選択



Aさん(79歳・女性)

自分の意思で望む最期を

- ・家族、兄弟はすでに他界。長年マンションでひとり暮らしをしていた。
- ・マンションの住人との関係は良く、仲が良かった。
- ・英会話スクールに通っており、そこでの友人も多かった。
- ・3年前に、がんが見つかって手術を行ったが、全身に転移していた。
- ・そこで、今後の生活について考えた。

病院を退院されたあとに地域包括支援センターに来院され、ご自身の今後についてどうしたら良いかを相談されました。まず最初に**財産について決めておきたい**というご要望でしたので、**司法書士**をご紹介しました。その後は、必要なときにご相談いただき、その都度情報を提供していました。



地域包括支援センタースタッフ

Aさんが利用したサービス

● 死後事務委任契約

認知機能が落ちたときの支払い、亡くなった際の葬儀の手続き、死後の家財道具の処分や賃貸住宅契約の解除などを生前に委任した人に行ってもらう契約。Aさんは、地域包括支援センターにて紹介された司法書士と、必要なサービスを契約した。

● ひとり暮らし高齢者の登録

65歳以上のひとり暮らし高齢者を登録し、民生委員による訪問などを受けるサービス。地域包括支援センターで登録が可能。

● 訪問診療

24時間体制で在宅医療をサポートする医療サービス。Aさんはがんの手術を行ったので、医療保険で訪問診療、訪問看護のサービスを受けた。在宅生活を支えるサービスには、介護保険による訪問介護もある。

● 定期巡回・随時対応型訪問介護看護

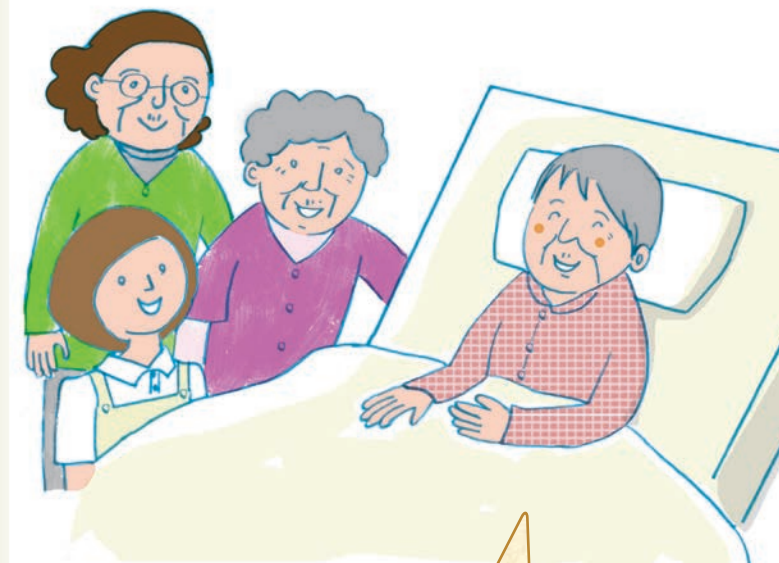
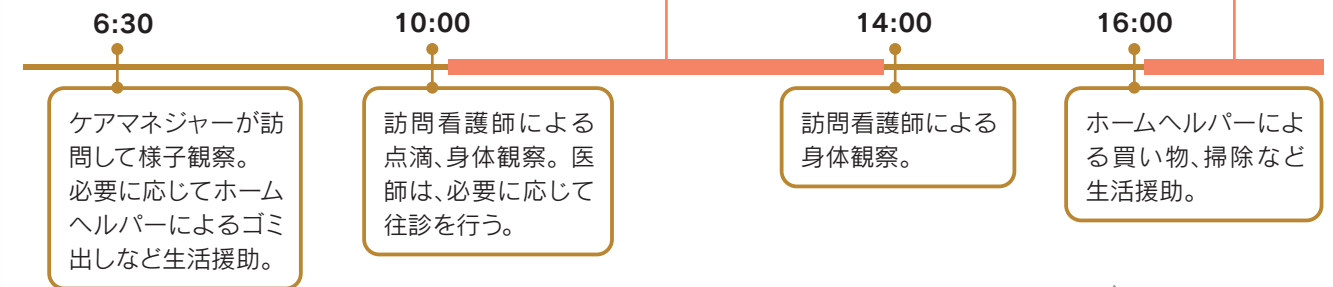
重度の要介護者の在宅生活を支えるため、24時間体制で介護と訪問看護を一体的に提供するサービス。要介護認定を受けていて、在宅生活を望まれている方に適している。

ある日の生活の流れ

訪問診療・看護や民生委員、友人などの支援を受けながら、ひとり暮らしでも自立した生活を送っていました。



タイムスケジュール



生活の自立が困難になったら…

- 介護保険で福祉用具(ベッド)のレンタルが可能です。
- ホームヘルパーの利用で、排泄介助なども可能です。
- ホスピスなどへの入院の相談も、**地域包括支援センター**でお受けします。



Aさんの宝物「ぬか床」

ご近所の方にもおいしいと評判だった、Aさんのぬか漬け。いつも作ってはお裾分けしていたそうです。食事がとれなくなっても、誰かのために、毎日ぬか漬けを作りました。そして寝たきりになったあとも、ベッドサイドでぬか床を返していました。

ぬか床はAさんと社会を結ぶ絆そのものでした。

Aさんは、ご自身の病気がわかった時点で、**自分自身の最期のあり方**を決断されました。その思いに沿うよう、私たちも相談を重ねました。誰もが迎えるそのときを、ご自身が納得のいくものにできるお力になればと思います。



願いは人それぞれです。まずは、お気軽にご相談ください。

